

論文

トリン寺仏塔より出土した世間施設論の梵文写本

松田和信

〔抄録〕

西チベット・ガーリー地区のトリン寺 (mTho lding dGon pa) の仏塔址から出土した梵文樺皮写本について、その中の1葉を〔根本〕説一切有部教団の『世間施設論 (Lokaprajñapti)』に同定し、ローマ字転写に加えて、再構成した梵文テキストと和訳を提示する。この1葉に含まれる梵文テキストは『世間施設論』において月と太陽と星形の構造を解説する箇所を8割以上をカバーする。本稿によって、従来、チベット語訳とわずかな梵文断簡でしか知られていなかった『世間施設論』に新たな梵文原典の一部を付け加えることになる。

キーワード：世間施設論、梵文写本、トリン寺、月輪、日輪

まえがき

本年7月末のことであったが、西チベットのガーリー (mNga' ris 阿里) 地区に点在する寺院に所蔵される稀覯文献のカラー図録を大谷大学の上野牧生氏が筆者の研究室に持って来てくれた。北京の書店で3月末の出張ついでに購入したとのことで、チベット語写本に混じって、2葉の梵文写本が紹介されているからだという。奥付を見ると、1年以上前の2017年3月に北京の民族出版社より刊行された図録であったが、筆者は出版については全く知らなかった⁽¹⁾。図録に掲載された2葉はいずれもギルギット・バーミヤン第2型書体 (プロトシャーラダー体とも) のブラーフミー文字で書写された樺皮写本であった。上野氏が帰った後、いただいたカラー複写をしばらく眺めていると、1葉は密教文献のように思えたが、もう1葉は〔根本〕説一切有部教団の『世間施設論 (Lokaprajñapti)』であることが分かった。筆者は今から35年ほど前に京都の百万遍知恩寺や大阪の高貴寺といった関西の4カ寺に1葉づつ伝えられたアビダルマ論典の貝葉写本と、インドのウツジャンに保存されているギルギット写本の一部を『世間施設論』に同定して出版したことがあるが⁽²⁾、たった1葉とはいえ、35年を経て、同じアビダルマ文献の新たな写本に出会えたことは感慨深い。上野牧生氏に感謝したい。この貴重な1葉から回収される梵文テキストと和訳を提示することが本稿の目的である。

1 発見地と写本の年代

図録によると、2葉はガーリー地区のトリン寺 (mTho lding dGon pa) に所蔵されている写本とのことであるが、トリン寺のこの種の写本は以前より知られていた。筆者の知る限り、2000年に北京で刊行されたチベット文物の豪華図録『宝蔵』第1巻の中で、今回と全く同じギルギット・バーミヤン第2型書体の文字で書写された樺皮写本の数葉が大きく紹介されていたが⁽³⁾、一見して、いずれも巨大な『般若経』写本の一部であることが分かる。図録の説明文によると、それらはトリン寺の仏塔址から発見された写本だという。ただし、この図録では今回の図録に掲載されている2葉についてはなんら言及がない。トリン寺は、文化大革命時のことであるのかどうか筆者には定かではないが、大きく破壊された寺院として知られている。それらの写本は寺院の書庫に保存されていた伝世写本ではなく、寺院の仏塔からの出土写本だというのである。ただ、この図録にも、今回目にするようになった図録にも、一体どれだけの種類、どれだけの量の写本が仏塔址から発見されたのかは全く記されていない。『世間施設論』についても、同じ写本の他の部分も発見された可能性があるように思えるが、現時点では、他の情報を筆者は知らない。

今回の2葉のうち、密教文献の1葉については、駒澤大学の加納和雄氏に見ていただいたが、『グフヤサマージャ・タントラ』の聖者流のテキストである *Caryāmelāpakapradīpa* の一部で、著者は密教のアールヤデーヴァだという⁽⁴⁾。そうであるならば、この写本の年代はどんなに早くとも9世紀以降ということになるが、ギルギット・バーミヤン第2型書体が相当後代まで使用されていたことを窺わせる一例となるであろう。西チベットのトリン寺はインドのカシュミールからそう離れているわけではない。これらの写本が9世紀以降にカシュミールで書写され、トリン寺にもたらされことは容易に想像できる。なおギルギット・バーミヤン第2型書体は我が国に伝えられた梵字と共通の書体であり、関西4カ寺のアビダルマ貝葉4葉も同じ文字で書写されている。ただし、我が国の貝葉4葉には7世紀前に遡るグプタ・ブラーフミー文字の要素も強く残っており、共通の書体とはいえ、トリン寺の写本より相当古い時代に北インドで書写され、中国を経て我が国に将来された貝葉写本であることは間違いない。

2 世間施設論について

〔根本〕説一切有部教団の論蔵を構成する「六足発智」の七論典のうち、『発智論 (*Jñānaprasthāna*)』『集異門論 (*Samgītiparyāya*)』『法蘊論 (*Dharmaskandha*)』『界身論 (*Dhātukāya*)』『識身論 (*Vijñānakāya*)』『品類論 (*Prakarāṇa*)』の六論典については、中央アジアとギルギット出土の梵文断簡を除いて、すべて玄奘三蔵の漢訳によって伝えられているのに対して、複数のテキストから構成される施設論類については、『因施設論 (*Kāraṇaprajñapti*)』だけが宋代の漢訳で伝えられ、『発智論』等の他の六論典がまったくチベット語訳されなかったのに対し、『世間施設論』『因施設論』『業施設論 (*Karmaprajñapti*)』

の三種の『施設論』がチベット語訳で伝えられている。ただ、説一切有部の『施設論』がこの三種だけであったかどうかは不明である。本庄良文教授の研究によって、すでに失われてしまったが、『随眠施設論 (*Anuśayaprajñapti*)』『名色施設論 (*Nāmarūpaprajñapti*)』等の存在も推測されているからである⁽⁵⁾。明治以降の我が国の研究者がいくら挑戦しても正体不明のままであった日本のアビダルマ貝葉4葉が、筆者の手によって『世間施設論』だと判明したのも、チベット語訳文献まで探索の対象を広げたからであったと思う。平安時代に我が国にもたらされたインド由来の貝葉写本が、対応する漢訳も存在せず、チベット語訳文献にのみ対応箇所があるとは当時の研究者は誰も想像すらしなかったのであろう。なお、『世間施設論』にはチベット語訳に加えて、日本の貝葉とギルギット写本以外にも、ドイツ探検隊の将来したトルファン写本中にも紙写本の梵文断簡数点が発見されている⁽⁶⁾。

『世間施設論』は娑婆 (*sahā*) 世界の構造を中心に説く、所謂仏教宇宙論の初期アビダルマ論典とみなされるが、トリン寺の1葉がカバーする範囲は、月輪 (*candramaṇḍala*) と日輪 (*sūryamaṇḍala*) と星形 (*tāraḥarūpa*)、つまり月と太陽と星々の構造を解説する箇所の8割以上を占める。この1葉と平行箇所を持つ他の梵文断簡は知られていない。その点でもこれは貴重である。目録によると、フォリオサイズは27.5 cm×9 cm とそう大きくはないが、14行づつ両面にびっしりと書かれていて、北京版と比較すると、日輪の項では月輪と同じ文章を省略していることにより、この1葉だけでチベット語訳の3葉6面に対応する⁽⁷⁾。ほぼ完全な1葉であるが、図録の写真では、樺皮裏面の外側レイヤーの一部が折れ曲がって見えない部分がある⁽⁸⁾。ただし、文章を想定して読むことは可能である。表面の左欄外にフォリオ番号が書かれているが、これをどう読むかは判然としない。筆者には79に見えるが、問題はこの数字の下に21と読みうる数字がチベット語の組み合わせ文字で書かれていることである⁽⁹⁾。チベット語で書かれた数字は後代にこの写本を見たチベット人によって追記されたものであろう。この写本が『世間施設論』のみを書写した写本であるとすれば、チベット語訳の対応箇所から判断して、21は妥当なフォリオ番号であるが、ブラーフミー文字で書かれた数字はとて21とは読めない。現時点ではフォリオ番号の問題は解決できない⁽¹⁰⁾。

なお、35年前、筆者は日本の貝葉の同定にあたって『世間施設論』のチベット語訳を参照するしかなかったが、その後、真宗大谷派の僧侶加藤清氏が残したチベット語訳からの和訳遺稿が同朋大学の福田琢氏によって整理・公刊されたため、『世間施設論』は随分近づきやすい論典となった⁽¹¹⁾。人知れずに眠っていた資料に光を当てられた福田琢氏に感謝したい。

3 ローマ字転写

まずこの1葉のローマ字転写を提示する。所謂ドイツ方式で使われる転写記号を用いるが、書写生の誤写は訂正せず、書写生が書き忘れたと思われる文字、破損した文字、およびレイヤーが折れ曲がった箇所、さらに削除すべきと思われる文字と句読点はそれぞれの用途別括弧

に入れた。なお短いダンダは普通のダンダと区別していない。

recto

- 1 syāntaro bhūmibhāgaḥ abhirūpo darśanīyaḥ prāsādikaś citra | sucitra | ekaśatena dhātuśatena citritāḥ | mṛduḥ sumṛduḥ tadyathā tūlapicur vā{h} karpāsapi-
- 2 cur vā | nikṣipte pāde avanamaty utkṣipte pāde unnamati | ājānumātrai māndārakaiḥ puṣpai samchanna <|> yatrāmanuṣyā vāyusaṃyogena paurāṇāni puṣpāny abhi-
- 3 nirhriyanti | navāni puṣpāni samākīryante | yathā cāha{h} paurāṇāni <pu>ṣpāny abhinirhriyante || navāni puṣpāni {pi} saṃharanti | mahānilā candrapure vānti ca-
- 4 ndramasaḥ puṇyadhīpateyaprabhāvā | candramaṇḍalasya madhye vethi{h} paṃcāśad yojanānāny āyāmenādhyardhayojanaṃ viṣkambheṇa | abhirūpā darśanīyā prāsādika-
- 5 kāmcanavālukā{s}tīrṇā candanavāriparīṣiktā | tasyā ubhayo pārśvayo puṣkariṇyo māpitā | tā khalu puṣkariṇyā | caturvidhābhir aṣṭakābhi sthitā sauvarṇama-
- 6 yābhi rūpyamayābhi vaiḍūryamayābhi sphaṭikamayābhi | tāsāṃ khalu puṣkariṇīnāṃ caturdiśaḥ sopānāni māpitāni | tāni khalu sopānāni caturvidhā-
- 7 bhir aṣṭikābhi <citāni> | suvarṇamayibhi rūpyamayibhi | vaiḍūryamayibhiḥ sphaṭikamayibhiḥ <|> tā khalu puṣkariṇyāś caturvidhābhi vedikābhir anuparikṣiptāḥ suvarṇa-
- 8 mayibhir yāva | sphaṭikamayibhi | suvarṇamayyā vaidikāyā rūpyamay{y}am adhiṣṭhānam ālambanaṃ sū[ca]ko māpita | rūpyamayyā sauvarṇamayam <|> vaiḍūryamayyā sphaṭika-
- 9 mayam <|> sphaṭikamayyā veḍūryamayam adhiṣṭhānam ālambanaṃ sūcako māpitāḥ abhirūpā darśanīyāḥ prāsādikāḥ <|> pūrṇā śītena vāriṇā{h} kṣodrakalpenā<m>bu-
- 10 nā{h} <|> utpalakumudapuṇḍarīkasaṃcchannāḥ <|> vīvidhā jalajā śakunayo valguśvarā {} manojñāsvarā | madhurasvarā | kāmarūpiṇo 'bhi<ni>kūjanti | tasā sāmanā-
- 11 kena vīvidhāḥ puṣpavṛkṣāḥ phalavṛkṣāḥ sujātā susaṃsthitāḥ supariṇatāḥ āpīdakajātā | tadyathā dakṣeṇa mālākāreṇa vā mālākārāṃte-
- 12 vāsīnā vā mālāguṇāni grathitāny ava<taṃ>sakāni sukṛtāni <|> vīvidhā | sthalajā śakunayo valguśvarā | yāvad abhinikūjanti{h} <|> caturvidhā kalpaduṣyavṛ-
- 13 kṣāḥ nilā yāvad avadātā {ni} | vīvidhā vādītravṛkṣāḥ viṇāv{ī}ṇuvallarīśuḥśakāḥ <|> vīvidhā ābharaṇavṛkṣāḥ hastopagāḥ pādopagāḥ
- 14 guhyā prākāśikā | yādṛśam ākāmṣa{m}ti devo vā devakanyā vā | saḥacittotpādād asya tādṛśo haste prādurbhavati | caturvidhā sudhā madhu madhumādhavaṃ pā-

verso

- 1 naṃ <|> harmyāni kūṭāgārāni prāsādāḥ āmbāśanakāny avalokanakāni | nārīganavīrājī{tāni } apsara<ḥ>saṃghaṇīṣevitāni tūryavādābhitādanāni nānā{gandhani-}
- 2 ṣevitāni upetāny annapānena | yatra candro devaputraḥ saparivāraḥ krīḍati ramate pa{ri}-cārayati | svaṃ karmaphalaṃ pratyanubhavati | sūryamaṇḍalasya kiṃ (p)r{amāṇam }
- 3 āha <|> sūryamaṇḍalam ekapaṃcāśad yojanāny āyāmena | ekapaṃcāśad yojanāni vi{śkambhe-}[ṇa] | tṛpaṃcāśad yojanāni yojanaśataṃ samantaparikṣepe{ṇa }
- 4 ardhaśaṣṭāni yojanāny aṣṭādaśamaś ca bhāgo yojanasya {yo koṭī} bahutvena | abhirūpaṃ darśanīyaṃ prāsādikaṃ sphaṭikamayam sauvarṇeṇa prākāreṇā-
- 5 nuparikṣiptam | sa khalu prākāro 'rdhayojanaṃ uccatvena vistareṇaiva eva vaktavyam yathā candramaṇḍalam* <|> {īha tv ekapaṃcāśadyojanāni vīthī āyāmena } tā-
- 6 rakārūpāṇam kiṃ pramāṇam | āha | <yāni> tārakārūpāni sarvamahānti | tāny aṣṭādaśakrośa-

- kāni <|> yāni sarvaparittāni | tāni trikroṣakāni <|> [dvādaśa]kroṣakā-
 7 ni ca {} yadbhūyasa <|> abhirūpāni darśaniyāni prāsādik{ay}āni sphaṭikamayāni sauvarṇena
 prākāreṇānuparikṣiptāni | tasmim̄ khalu prākāre caturvidhā-
 8 ni khoḍakāni māpitāni suvarṇamayāni yāva sphaṭikamayāni | caturvvidhāny āvidhyanakāny
 avalokāni | tasyāntaro bhūmibhāgaḥ abhirūpo darśa-
 9 nīyaḥ prā[sā]dikāḥ citra | sucitra | ekaśatena dhātuśatena citritaḥ mṛduḥ sumṛduḥ tadyathā
 tūlapicur vā | karpāsapitur (vā | nikṣipte pāde a-)
 10 vanamaty utkṣipte pāde unnamati | ājānumātramāndārakaiḥ puṣpai saṃ[channa |]
 <yatrāmanuṣyair> [vā]yusaṃyogena paurāṇāni{ḥ} puṣpāny abhi<ni>rhriya(nt)i (navāni puṣpā-
 ni samā-)
 11 kīryante | yathā cāha paurā{ṇya}ṇa puṣpāny abhinirharaṃti navāni puṣpāni samā[kriya]nti |
 mahānilā vānti vimānavareṣu | vaim(ānikānām puṇyādhipate-)
 12 ye pratyam̄ yā .. <|> teṣā<ṃ> madhye puṣkariṇyo māpitā | tā khalu puṣpariṇyaḥ caturvidhā-
 [bhir aṣṭakā]bhiś citāḥ suvarṇamayibhi | rūpyamayī{bhi vaiḍūryamayibhiḥ}
 13 sphaṭikamayibhiḥ <|> tāsāṃ khalu puṣkariṇinām caturdi [śaṃ so] pānāni māpitāni | tā[ni
 kha]lu sopānāni | caturvidhābhir iṣṭakābhi (citāni suvarṇama-)
 14 yibhi | rūpyamayibhi | vaiḍūryamayibhi | spha[ṭika]ma[yibhi]ḥ | tā khalu puṣkariṇyaḥ catu
 [rvi]dhābhir vedikābhir anuparikṣiptā | yāva[d]. ///

4 梵文テキストと和訳

仏教聖典の伝承は口承が基本であるが、紀元後になると書写による伝承も始まる。しかし、書写という営みの性格上、写本は書写年代が古ければ古いほど正確な読みを伝えているといえる⁽¹²⁾。この1葉は9世紀以降に書写されたと思なされるが、この時代の写本は、例えば、書写生の技術も高かったグプタ王朝期の写本に比べると、もはや書写の技術も失われ、正確な読みを伝えているとは言い難い⁽¹³⁾。ローマ字転写を見れば一目瞭然であるが、サンディ、格変化は乱れ、しばしばヴィサルガをダングで置き換えたり、受動文の主語と動詞語尾が破綻するなど、文法規則を逸脱する箇所は枚挙に暇がない。これは何らかの崩れた梵語で書かれているというわけではなく、単に書写の問題であるとみなしてよいであろう。以下にローマ字転写に基づいて作成した梵文テキストと和訳を提示するが、語形はすべて正規形に修正し、ダング等も修正、加筆した。これらについては一々注記しない。ローマ字転写と以下の梵文テキストを比較していただければ、筆者がどのように修正したかが分かるはずである。

またこの1葉は、前述のように、娑婆世界の説明の中で、月輪と日論と星形の解説部分をカバーするが、これら三者の基本的な構造については、ほぼ同文が繰り返されている。また『マーンダートリ・アヴァダーナ (Māndhātāvadāna)』に説かれる三十三天のスダルシャナ城 (Sudarśaṇanagara) の構造と共通する部分が多く見られる。『マーンダートリ・アヴァダーナ』は『ディヴァ・アヴァダーナ (Divyāvadāna)』の第17話であるから、カウエルらによる梵文校訂テキストが知られ、さらに単独では松村恒氏によってギルギット写本から校訂されている⁽¹⁴⁾。以下のテキスト作成にあたっては、これら二つの梵文テキストを参照した。さらに同

アヴァダーナは『根本説一切有部律』の『薬事 (*Baiṣajyavastu*)』にも取り込まれているが、この部分は『薬事』のギルギット写本には含まれていない。ただ『薬事』のチベット語訳には含まれるので、現在早稲田大学高等研究所の八尾史さんのチベット語訳からの『薬事』の和訳を参照させていただいた⁽¹⁵⁾。

[candramaṇḍala] … (ta)(r1)syāntaro bhūmibhāgo 'bhirūpo darśaniyaḥ prāsādikaś citraḥ sucitra ekaśatena dhātuśatena citritaḥ | mṛduḥ sumṛduḥ tadyathā tūlapicur vā karpāsapi(r2)cur vā nikṣipte pāde avanamaty utkṣipte pāde unnamati | ājānumātrair mādārakaiḥ puṣpaiḥ saṃchannaḥ | yatrāmanuṣyair vāyusamyogena paurāṇāni puṣpāny abhi(r3)nirhriyante | navāni puṣpāni samākīryante | yathā cāha paurāṇāni puṣpāny abhinirhriyante | navāni puṣpāni samākīryante | mahānilāḥ candrapure vānti ca(r4)ndramasaḥ puṇyādhipateyaprabhāvāt |

candramaṇḍalasya madhye vithī paṃcāśad yojanānāny āyāmenādhyardhayojanaṃ viṣkambheṇa | abhirūpā darśaniyā prāsādikā (r5) kāmcanavālukātīrṇā candanavāripariṣiktā | tasyā ubhayoḥ pārśvayoḥ puṣkariṇyo māpitāḥ | tāḥ khalu puṣkariṇyaḥ caturvidhābhir iṣṭakābhiḥ sthitāḥ suvarṇama(r6)yibhī rūpyamayibhir vaiḍūryamayibhiḥ sphaṭikamayibhiḥ | tāsāṃ khalu puṣkariṇīnāṃ caturdiśaṃ sopānāni māpitāni | tāni khalu sopānāni caturvidhā(r7)bhir iṣṭakābhiḥ citāni suvarṇamayibhī rūpyamayibhir vaiḍūryamayibhiḥ sphaṭikamayibhiḥ | tāḥ khalu puṣkariṇyaś caturvidhābhir vedikābhir anuparikṣiptāḥ suvarṇa(r8)māyibhir yāvat sphaṭikamayibhiḥ | suvarṇamayyā vedikāyā rūpyamayam adhiṣṭhānam ālambanaṃ sūcako māpitāḥ | rūpyamayyāḥ suvarṇamayam | vaiḍūryamayyāḥ sphaṭika(r9)-mayam | sphaṭikamayyā vaiḍūryamayam adhiṣṭhānam ālambanaṃ sūcako māpito 'bhirūpo darśaniyaḥ prāsādikaḥ |

pūrṇāḥ śītena vāriṇā kṣaudrakalpenāmbu(r10)nā | utpalakumudapuṇḍarikasaṃchannāḥ | vividhā jalajāḥ śakunayo valguśvarā manoḥśasvarā madhurasvarāḥ kāmarūpiṇo 'bhinikūjanti | tāsāṃ sāmanta(r11)kena vividhāḥ puṣpavṛkṣāḥ phalavṛkṣāḥ sujātāḥ susaṃsthitāḥ supariṇatāḥ āpīḍakajātāḥ | tadyathā dakṣeṇa mālākāreṇa vā mālākārānte(r12)vāsinā vā mālāguṇāni grathitāny avatamsakāni sukṛtāni | vividhāḥ sthalajāḥ śakunayo valguśvarā yāvad abhinikūjanti |

caturvidhāḥ kalpadūsyavṛ(r13)kṣāḥ nilā yāvad avadātāḥ | vividhā vādītravṛkṣāḥ vīṇāveṇuvallarisughośakāḥ | vividhā ābharaṇavṛkṣāḥ hastopagāḥ pādopagāḥ (r14) guhyāḥ prākāśikāḥ | yādṛśam ākāmṣati devo vā devakanyā vā saḥacittotpādād asya tādrśo haste prādurbhavati | caturvidhāḥ sudhā madhu madhumādhavaṃ pā(v1)nam | harṃyāni kūtāgārāni prāsādā āmbāsanakāny avalokanakāni | nārīgaṇavirājitāni | apsaraḥsaṃghaniṣevitāni tūryavādābhitādanāni nānāgandhani(v2)ṣevitāni upetāny annapānena | yatra candro devaputraḥ saparivārah kriḍati ramate paricārayati | svaṃ karmaphalaṃ pratyanubhavati |

[sūryamaṇḍala] sūryamaṇḍalasya kiṃ pramāṇam | (v3) āha | sūryamaṇḍalam ekapaṃcāśad yojanāny āyāmena | ekapaṃcāśad yojanāni viṣkambheṇa | tripaṃcāśad yojanāni yojanaśatam samantaparikṣeṇa | (v4) ardhaśaṣṭāni yojanāny aṣṭādaśamaś ca bhāgo yojanasya bahutvena | abhirūpaṃ darśaniyaṃ prāsādikaṃ sphaṭikamayam sauvarṇena prakāreṇā(v5)nuparikṣiptam | sa khalu prakāro 'rdhayojanam uccatvena vistareṇaivam eva vaktavyam yathā candramaṇḍalam |

[tārakārūpa] tā(v6)rakārūpāṇam kiṃ pramāṇam | āha | yāni tārakārūpāni sarvamahānti tāny aṣṭādaśakrośakāni | yāni sarvaparitāni tāni trikrośakāni | dvādaśakrośakā(v7)ni ca yadbhūyāś | abhirūpāni darśaniyāni prāsādikāni sphaṭikamayāni sauvarṇena prakāreṇānuparikṣiptāni | tasmīṃ khalu prakāre caturvidhā(v8)ni khoḍakāni māpitāni suvarṇamayāni yāvat sphaṭikamayāni | caturvidhāny āvidhyanakāny avalokāni |

tasyāntaro bhūmibhāgo 'bhirūpo darśa(v9)nīyaḥ prāsādikaś citraḥ sucitra ekaśatena dhātuśatena citritaḥ | mṛduḥ sumṛduḥ tadyathā tūlapicur vā karpāsapitur vā nikṣipte pāde a(v10)vanamaty utkṣipte pāde unnamati | ājānumātrair mādārakaiḥ puṣpaiḥ samchannaḥ | yatrāmanuṣyair vāyusaṃyogena paurāṇāni puṣpāṇy abhinirhriyante navāni puṣpāni samā(v11)kīryante | yathā cāha paurāṇāni puṣpāṇy abhinirhriyante navāni puṣpāni samākīryante | mahānilā vānti vimānavareṣu | vaimānikānām puṇyādhipate(v12)yapratyayāt |

teṣāṃ madhye puṣkariṇyo māpitāḥ | tāḥ khalu puṣpariṇyaḥ caturvidhābhir iṣṭakābhiś citāḥ suvarṇamayibhi rūpyamayibhir vaiḍūryamayibhiḥ (v13) sphaṭikamayibhiḥ tāsāṃ khalu puṣkariṇīnām caturdiśaṃ sopānāni māpitāni | tāni khalu sopānāni caturvidhābhir iṣṭakābhiś citāni suvarṇama(v14)yibhi rūpyamayibhir vaiḍūryamayibhiḥ sphaṭikamayibhiḥ | tāḥ khalu puṣkariṇyaḥ caturvidhābhir vedikābhir anuparikṣiptā yāvad ...

〔月輪〕⁽¹⁶⁾ ……その〔月輪の壘壁 (prākāra)〕内部の地面 (bhūmibhāga) は形よく (abhirūpa) 美しく (darśanīya) 端正で (prāsādika) 色とりどりで (citra) たいそう色とりどりで (sucitra) 百一〔種〕の顔料 (dhātuśata) で彩られ、例えば、トゥーラ綿 (tūlapicu) あるいはカルパーサ綿 (karpāsapicu) のように柔軟で (mṛdu) たいそう柔軟で (sumṛdu) 足を下ろすと沈み、足を上げると浮き上がり、膝までの量の (ājānumātra) マンダーラの (mādāraka) 花⁽¹⁷⁾に覆われている。そこでは人間でない者たちによって、風と結びついて (vāyusaṃyogena) 古い (paurāṇa) 花々 (puṣpāni) が吹き飛ばされ、新しい (nava) 花々がまき散らされる。例えば「月の城 (candrapura) では、月 (candramas) の福德の増上力によって⁽¹⁸⁾、大風 (mahānilā) が吹いて、古い花々が吹き飛ばされ、新しい花々がまき散らされる。」と言う如くである。

月輪の中央 (madhya) には、長さ (āyāma) 50 ヨーヅナ、幅 (viṣkambha) 1.5 ヨーヅナの道 (vīthi) がある。形よく、美しく、端正で、金の砂 (kāṃcanavālukā) が敷かれ、栴檀の水 (candanavāri) が撒かれている。その〔道の〕両側 (ubhaya-pārśva) には蓮池 (puṣkariṇī) が作られている。それらの蓮池は、金製 (suvarṇamayī) 銀製 (rūpyamayī) 瑠璃製 (vaiḍūryamayī) 水晶製 (sphaṭikamayī) の四種の煉瓦 (iṣṭakā) が積まれている⁽¹⁹⁾。それらの蓮池の四方に階段 (sopāna) が設置されている。それらの階段は、金製、銀製、瑠璃製、水晶製の四種の煉瓦が積まれている。それらの蓮池は、金製ないし水晶製の四種の欄干 (vedikā) で取り囲まれている。金製の欄干には、形よく、美しく、端正な銀製の台座 (adhiṣṭhāna) と支持棒 (ālambana) と留め金 (sūcaka) が設置され、銀製の〔欄干〕には金製が、瑠璃製の〔欄干〕には水晶製が、水晶製の欄干には、瑠璃製の台座と支持棒と留め金が設置されている。

〔また蓮池は〕冷たい (śīta) 水、蜜蜂の〔蜜の〕ような (kṣaudrakalpa) 水で満たされ、青蓮華 (utpala) 黄蓮華 (kumuda) 白蓮華 (puṇḍarīka) に覆われている。種々の水鳥 (jarajaśakuni) たちは、望みの姿を取って (kāmarūpin) 愛らしい声 (valgusvara) 快い声 (manojñasvara) 甘い声 (madhurasvara) で鳴いている。それら〔蓮池〕の周囲には、種々の花の木 (puṣpavṛkṣa) 果実の木 (phalavṛkṣa) がよく育ち (sujāta) 形よく育ち (susamsthita) 花が垂れ (supariṇata) 花で覆われている (āpīdakajāta)。例えば、有能な花輪職人 (mālākāra)

あるいは花輪職人の弟子 (antevāsin) によって花輪類 (mālāguṇa) が編まれ、耳飾り (avatamsaka) が良く作られるようなものである。陸鳥 (sthalaja-śakuni) たちも、愛らしい声で ……中略 (yāvat) …… 鳴いている。

青ないし白の四種の如意樹 (kalpadūsyavṛkṣa) があり、琵琶 (viṇā) 笛 (veṇu) 琴 (vallarī) 笙 (sughoṣaka) といった種々の楽器の樹 (vāditravṛkṣa) があり、手に付けたり (hastopaga) 足に付けたり (pādopaga) [服の] 内に付けたり (guhya) 外に付ける (prākāśika) 種々の装飾品の樹 (ābharanavṛkṣa) があり、天人 (deva) あるいは天人の娘 (devakanyā) がそのような物を望む心を起こすや否や (sahacittotpādāt) その通りの物がその者の手に現れる。スタ酒 (sudhā) マドゥ酒 (madhu) マドゥマダヴァ酒 (madhumādhava) パーナ酒 (pāna) の四種があり、望楼 (harmya) 楼閣 (kūṭāgārā) 高楼 (prāsāda) 鐘楼 (āmbāsanaka) 展望台 (avalokanaka) は、女性の群れ (nārīgaṇa) によって輝き、天女 (apsaras) の集団 (saṃgha) に給仕され、楽器の演奏 (tūryavāda) で囃され、様々な香 (nānāgandha) が用意され、飲み物と食べ物 (annapāna) が備えられている。そこで月の天子 (candro devaputraḥ) は仲間と共に戯れ、喜び、楽しんで、自らの業の果報を享受するのである。

〔日輪〕日輪 (sūryamaṇḍala) の量 (pramāṇa) はどれだけか。答える (āha)。日輪は長さ 51 ヨージャナ、幅 51 ヨージャナ、周囲 (samantaparikṣepa) 153 ヨージャナ、厚さ (bahutva) 5.5 ヨージャナ⁽²⁰⁾、および 18 分の 1 ヨージャナである。〔日輪は〕形よく、美しく、端正で、水晶製であり、金の罍壁 (prakāra) で囲まれている。その罍壁は高さ (uccatva) 半ヨージャナであり …… [これ以降の] 詳細は月輪の [項で答えた] 通りに説かれるべし⁽²¹⁾。

〔星形〕星形 (tārakārūpa) の量はどれだけか。答える。星形の中で最大のものは 18 クローシャであり、最小のものは 3 クローシャであるが、大部分は 12 クローシャである。〔星形は〕形よく、美しく、端正で、水晶製であり、金の罍壁で囲まれている。その罍壁の中に、金製ないし水晶製の四種の尖塔 (khōḍaka) 四種の上窓 (āvidhyanaka) 下窓 (avaloka)⁽²²⁾ が設置されている。

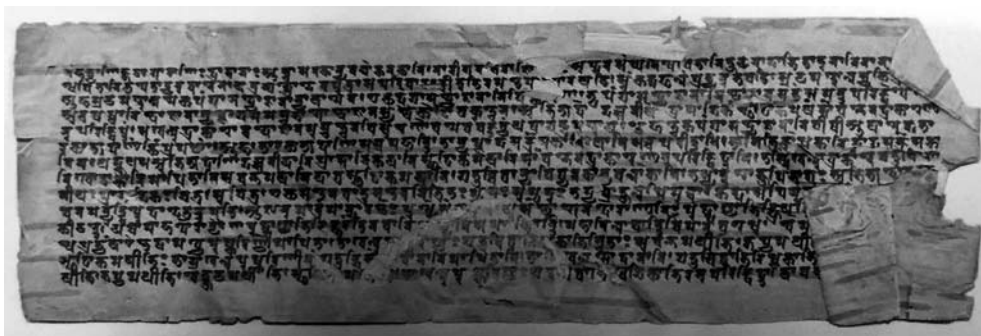
その〔罍壁の〕内側の地面は形よく、美しく、端正で、色とりどりで、たいそう色とりどりで、百一〔種〕の顔料で彩られ、例えば、トゥーラ綿、あるいはカルパーサ綿のように柔軟で、たいそう柔軟で、足を下ろすと沈み、足を上げると浮き上がり、膝までの量のマングーラの花に覆われている。そこでは人間でない者たちによって、風と結びついて、古い花々が吹き飛ばされ、新しい花々がまき散らされる。例えば「最上の宮殿では、天人 (vaimānika) たちの福德の増上力によって⁽²³⁾、大風が吹いて、古い花々が吹き飛ばされ、新しい花々がまき散らされる。」と言う如くである。

それら〔星形〕の中央には、蓮池が作られている。それらの蓮池は、金製、銀製、瑠璃製、

水晶製の四種の煉瓦が積まれている。それらの蓮池の四方に階段が設置されている。それらの階段は、金製、銀製、瑠璃製、水晶製の四種の煉瓦が積まれている。それらの蓮池は、金製ないし〔水晶製の〕四種の欄干 (vedikā) で取り囲まれている…

最後に

『世間施設論』の月輪と日論と星形の項に描かれる情景と『マーンダートリ・アヴァダーナ』に説かれる三十三天のスタルシャナ城の記述は、用いられた単語も文章もほぼ共通するものであるが、いずれがオリジナルかは現時点でははっきりしない。ある意味で、これは古代インド人の理想とする世界を描いたものとも言えよう。『世間施設論』は原始的ともいえる初期アビダルマ文献の一つであり、さらに両者はいずれも〔根本〕説一切有部教団の文献であるから、後者が前者の文章をそのまま用いた可能性はあろう。本稿で作成したテキストには、一部の単語が意味不明、あるいは一部の文章で構文が未確定の箇所もあり、決定版のテキストと和訳を公表したと言うつもりはないが、いずれにしても、同内容の文献は知られていなかったこと、これまで発見されていなかった『世間施設論』自体の梵文原典の一部を新たに紹介できたことに意味はあると思う。



図版『西蔵阿里地区珍貴古籍図録』(pp. 105-106, 原版はカラー)より転載。上=recto, 下=verso

参考文献

- 平岡 聡 [2007] 『ブッダが謎解く三世の物語 —— デイヴィヤ・アヴァデーナ全訳 ——』上巻、大蔵出版。
- 福田 琢 [1999-2004] 「加藤清遺稿 蔵文和訳『世間施設』」(1)『同朋佛教』34 (1999) pp.19-60, (2) 同 35 (1999) pp.27-43, (3) 同 36 (2000) pp.19-56, (4)『同朋大学論叢』84 (2001) pp.45-68, (5) 同 85・86 (2002) pp.189-68226, (6) 同 89 (2004) pp.93-109, (7)『同朋佛教』40 (2004) pp.25-52.
- [2000] 「『業施設』について」『日本仏教学会年報』65, pp.55-76.
- [2007] 「加藤清遺稿 蔵文和訳『因施設』」(1)『同朋佛教』43, pp.1-30.
- 本庄良文 [1998] 「『睡眠施設』『名色施設』—— 有部『施設論』の未知なる構成要素 ——」『印度学仏教学研究』47-1, pp.(141)-(146).
- 松田和信 [1982] 「梵文断片 *Lokaprajñapti* について —— 高貴寺・玉泉寺・四天王寺・知恩寺貝葉・インド所伝写本の分類と同定 ——」『仏教学』14, pp.1-21.
- [2010] 「中央アジアの仏教写本」『新アジア仏教史・中央アジア —— 文明・文化の交差点 ——』佼成出版社, pp.119-158.
- 八尾 史 [2013] 『根本説一切有部業事』連合出版。
- Cowell, E. B. and Neil, R. A. [1886] *The Divyāvadāna*, Cambridge, rep., 1970, Amsterdam.
- Dietz, Siglinde [1984] *Fragmente des Dharmaskandha — Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit*, Göttingen.
- [1989a] “A Brief Survey on the Sanskrit Fragments of the Lokaprajñaptiśāstra”, *Annual Memories of the Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute*, Vol. 7, pp.79-86.
- [1989b] “Remarks on a Fragmentary List of Kings of Magadha in a Lokaprajñapti Fragment”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band 33, pp.121-128.
- [1989c] “Die Verschiedenen Versionen der Lokaprajñapti”, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Supplement 7, pp.389-497.
- Matsumura, Hisashi [1980] *Four Avadānas from the Gilgit Manuscripts*, PhD diss., Australian National University.
- [1988] *The Mahāsudarsānāvadāna and the Mahāsudarsānasūtra*, Sri Satguru Publications, Delhi.
- Sengupta, Sudha [1975] “Fragments from Buddhist Texts”, *Buddhist Studies in India*, Motilal Banarsidass, Delhi, pp.137-208.
- SHT [1965-2017] *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 1-13, Franz Steiner, Wiesbaden.

〔注〕

- (1) 『西藏阿里地区珍贵古籍图録』北京、民族出版社 (2017.3)。梵文写本2葉は105-108頁に掲載。他の地区も含めて図録は同時に5冊刊行されたようで、うち3冊がカラー図版付図録である。筆者は中国佛学院 (北京) の専任講師象本法師にお願いして阿里地区図録を、残り4冊については中国書店より本年9月にすべて入手した。5冊中、梵文写本は阿里地区図録に2点掲載されているのみで、あとはすべてチベット語の稀観文献である。
- (2) 松田1982。ウツジャインの『世間施設論』写本については、拙稿ではチベット語訳の対応頁を示したのみで梵文テキストは未掲載。ローマ字転写は Sengupta 1975 に発表されているが、『世間施設論』に同定されているわけではない。単にラフなローマ字転写が示されるのみ。従って、ウツジャイン写本の『世間施設論』については研究は未完のまま残されていると言える。なお同書に掲載されているウツジャインの『法蘊論』部分については Dietz 1984 に校訂テキストが出版されている。
- (3) 『宝蔵 —— 中国西藏歴史文物 ——』(第一冊) 朝華出版社 (2000)。トリン寺出土の般若経樺皮写本は144-145頁に掲載。
- (4) 加納和雄氏の7月28日付私信による。
- (5) 本庄良文1998。

- (6) SHT 1134 (Teil 5), 1594 (Teil 6), 1678 (Teil 7), 4214 (Teil 10), 6652 (Teil 12). 『世間施設論』の梵文断簡全般については Dietz 1989a, b, c 参照。
- (7) P. ed., No. 5587, Khu 49a6-52a7. この部分のチベット語訳からの和訳については、福田琢 1999-2004 の (3) pp. 41-45 参照。
- (8) 樺皮写本は貝葉写本と異なり、数枚の薄いレイヤーを重ねて作成されているため、片面全体が剥離して失われたり、一部が剥離したり折れ曲がることがしばしば見られる。
- (9) 小野田俊蔵教授の御教示による。本稿におけるチベット語の片仮名表記についても同教授より御教示をいただいた。お礼申し上げます。
- (10) 本稿末尾に図録から写本写真を転載しておくので、参照していただきたい。
- (11) 福田琢 1999-2004. 福田氏は『世間施設論』に引き続いて、『因施設論』についても刊行を始めている (福田琢 2007)。さらに『業施設論』についても加藤清氏の遺稿を紹介している (福田琢 2000)。本稿の 1 葉と対応する月輪・日輪・星の和訳は福田琢 1999-2004 の (3), pp. 41-45.
- (12) インドと中央アジアにおける仏教写本の伝承については拙稿 (松田 2010) を参照して頂きたい。
- (13) 例えば、筆者も研究に加わっているギルギット写本の『長阿含 (*Dirgha-āgama*)』はこの 1 葉の年代に近い 8 世紀の書写とみなされる。見た目は専門の書写生の書いた美しい写本であるが、書写された梵文『長阿含』のテキスト自体は誤写と非正規形の綴りに満ちている。
- (14) *Divyāvadāna* については、Cowell 1886, pp. 220-222. *Divyāvadāna* は長い間日本語訳されていなかったが、10 年前に京都文教大学の平岡聡教授の読み易い全訳が公刊された。この 1 葉と平行する箇所は、平岡聡 2007, pp. 390-391 参照。ギルギット写本からの校訂テキストは松村恒氏のオーストラリア国立大学に提出された学位論文に含まれる。対応箇所は Matsumura 1980, pp. 17-22. 松村恒氏の学位論文の入手にあたっては八尾史さんの手を煩わせた。御礼申し上げます。松村氏は *Mahāsudarśanāvadāna* も刊行しているが、それにも一部同文が含まれる (Matsumura 1988)。
- (15) 八尾史 2013, pp. 312-313.
- (16) この 1 葉には月輪の冒頭部の文章は含まれないが、次の日輪の項と同じ文章である。チベット語訳からの和訳は福田琢 1999-2004(3), p. 41 参照。
- (17) 写本では *māndāraka* であるが、これは *mandāra* の形容詞形。*Divyāvadāna* では *mandārava*, Matsumura 1980 では *māndāraka* で、この写本と同じ。
- (18) 写本では *candramasaḥ puṇyadhīpateyaprabhāvā* (*sic*) と書かれているが修正した。これと同じ構造の文章は星の項でも現れ、そちらでは、写本は *vaim(ānikānām puṇyādhipate)* (v12) *ye pratyam yā ..* としか読めないが、これをテキストでは *vaimānikānām puṇyādhipate(v12)yapratyayāt* と修正した。チベット語訳では両者とも同文で訳されているにもかかわらず、写本でなぜ両者が異なるか不明。とりあえず同文として和訳しておく。
- (19) 他の箇所では *cita* であるが、ここでは *sthita* が使われている。*cita* に修正すべきか。
- (20) 写本では *yo koṭī bahutvena* と書かれている。*yo koṭī* は意味不明。削除した。ただチベット語訳は「厚さ」と訳していて、*bahutva* を「厚さ」と翻訳可能かどうか疑問が残る。
- (21) 月輪の項と同じであるので、この 1 文だけを置いて、以下を省略するが、写本では省略されたはずの一部 (*iha tv ekapaṃcāsadyojanāni vīthī āyāmena*) が書かれている。ローマ字転写の項参照。校訂テキストでは削除した。なお、チベット語訳では省略されずに全文が訳されている。
- (22) *khōḍaka, āvidhyānaka, avaloka* が実際に如何なるものか不明。とりあえず八尾史 2013 (p. 312) 「小塔…上を見る、下を見る窓」を参照して訳した。Matsumura 1980 (p. 18) では、*khōḍaka, udvedhaka, nirvedhaka*. *Divyāvadāna* では、*...ṣoḍakā ... ūrdhvī ekā nibaddhā saṃkramaṇikā*. 平岡聡 2007, p. 390 「笠石…〔塚の〕上には一つの休憩室…」と訳し、平岡は笠石と訳した *ṣoḍaka* を意味不明の語とする。
- (23) 注 18 参照。

(まつだ かずのぶ 仏教学科)

2018年11月15日受理